

沖縄大学における聴覚障がい学生支援の軌跡と展望 ～聴覚障がい学生のライフヒストリーインタビューを中心に～

横山正見*

The history and prospects about support systems for deaf or hard of hearing students in Okinawa University. —Focus on life history interview with deaf or hard of hearing students.—

YOKOYAMA Masami

要旨

沖縄大学の聴覚障がい学生支援について、アンケート調査と聴覚障がい学生へのライフヒストリーインタビュー¹を中心に考察した。約10年間で講義等公的空間での情報保障は整備されつつあるが、私的空間でのコミュニケーションには課題があり、組織や場所の整備等新たな取り組みの必要性が明らかになった。

要約

沖縄大学が聴覚障がい学生支援に取り組み始めて約10年が経つ。その歴史を振り返ると1980年代の風疹による聴覚障がい学生の在籍期、2000年代の組織的な取り組みの開始期、2010年代の取り組みの定着と発展期に区分できる。聴覚障がい学生の多くは「支援体制が充実していること」を基準に進学を決めており、法制度の整備や聴覚障がい学生数の推移も合わせて考えると、今後も継続して在籍することが予想される。

聴覚障がい学生は、支援体制が整いつつある中で人間関係を構築し自己肯定感を養い、大学での経験が卒業後の仕事にも影響を与えていることが分かった。しかし、私的空間でのコミュニケーションには課題が見出された。講義など公的空間での情報保障が進んだ結果明らかになった新たな課題といえよう。

今後の展望として組織と場所の創設の必要性が見出される。人や情報の集約、コミュニケーションモデルの提示、理解啓発、通訳制度の充実、学内外の連携、聴覚障がい学生のエンパワメント等の機能が求められる。新たな取り組みの幕開けである。

キーワード：聴覚障がい学生支援、聴覚障がい学生、ライフヒストリーインタビュー、私的空間でのコミュニケーション

* 沖縄大学地域研究所特別研究員／障がい学生支援コーディネーター／非常勤講師
yokoyama@okinawa-u.ac.jp

Abstract

This paper attempts to reveal the history and prospects of support systems for the deaf or hard of hearing students in Okinawa University.

The history of support systems in Okinawa University can be classified into three historical periods.

I. In 1980s: There were approximately 10 deaf or hard of hearing students by congenital rubella syndrome.

II. In 2000s: The organizational support activities began.

III. In 2010s: The support systems were established and developed.

Most of the deaf or hard of hearing students decide to enroll in the Okinawa University for the enrichment of informational guarantee.

Looking from setting up legislation about people with disabilities and the increasing number of deaf or hard of hearing students, they will continue to enroll.

The life-history interview and the questionnaire survey showed that informational guarantee and the relationships with their friends in university life give the deaf or hard of hearing students their self affirmation. Furthermore, it was also found out that the experiences in university days affect their life after graduation.

However, they still have problems in communication with the non-handicapped in their private life. These problems became clear after the process of enrichment of informational guarantee was evolved through the public space of university lectures.

For future prospects, it is hoped that a support organization and a place where they belong is prepared in Okinawa University. There are a lot of functions to be performed, such as putting human and information resources together, and showing new communication models, enlightening activities, enrichment of informational guarantee, building network systems, empowerment of the deaf or hard of hearing students.

It is just the beginning of a new action program about support systems for the deaf or hard of hearing students in Okinawa University.

1. はじめに

沖縄大学の聴覚障がい学生支援は、2002年に始まり2004年からは組織的に取り組まれ、10年以上が経過した。この間に在籍した聴覚障がい学生は合計13名、毎年平均して3～4名在籍し、支援学生は毎年約50名が登録している。障がい学生支援コーディネーター²（以下、コーディネーター）は2004年に雇用が始まり、2015年には3名体制となるなど大学に聴覚障がい学生支援が定着した。

全国的にみると、高等教育機関に在籍する聴覚障がい学生数は2005年の1,158名から2014年は1,654名となり聴覚障がい学生の増加がみられる³「日本学生支援機構（2006）（2015）」。沖縄県内の高等教育機関でも同様の傾向がみられ、2007年に10名であった聴覚障がい学生は2014年には14名となっている「横山（2015）」。

白澤（2013）より、聴覚障がい学生支援に関わる法制度に目を向けると、2011年8月に「障害者基本法」に「合理的配慮⁴」の文言が明記され、2012年12月文部科学省「障がいのある学生の修学支援に関する検討会」報告にて正課教育の他、正課外活動も含め「合理的配慮」

を行うことが記された。そして、2013年6月に「障害者差別解消法」（2016年4月施行）が成立し、2014年1月には「障害者権利条約」が批准された。こうして、高等教育機関における聴覚障がい学生支援は「合理的配慮」として法的な根拠を持つものとなる。

地方自治体で制定され始めている「手話言語条例⁵」や沖縄県等で制定されている「障害者条例⁶」も聴覚障がい学生支援の支えとなる。

さらに、沖縄大学、沖縄県、全国の聴覚障がい学生数の状況、そして法制度の整備を考えると今後も聴覚障がい学生の在籍が予想される。沖縄大学の聴覚障がい学生支援は、過去の取り組みをまとめ今後の展望を見出す時期にあると考える。

1.2 用語の定義

本稿における「聴覚障がい学生」の定義は、日本学生支援機構（2015）の「障害学生」の定義⁷に加え、身体障害者手帳（聴覚言語障害）を保持しておらずとも講義で第三者の支援を受けている学生も含んでいる。また、聴覚障がいには、「ろう」「難聴」「中途失聴」などがあるが、「聴覚障がい学生」と統一した。

「情報保障」とは、身体的なハンディにより情報収集に困難がある者に対し、代替手段で情報を伝えることである。本稿では第三者がノートテイク⁸、手話通訳等を用いて音声情報を視覚情報に変換し聴覚障がい者へ伝えることをいう。「聴覚障がい学生支援」とは情報保障に加え、個別相談、理解啓発等も含めた聴覚障がい学生への支援活動のことである。

沖縄大学の用語に倣い本稿では「障がい」の表記を使うが、法令や引用の際はこの限りではない。また、本稿で「現在」と使う場合は2015年5月のことである。

1.3 研究方法とデータ収集

アンケート調査とライフヒストリーインタビューを基に考察した。データ収集期間は2014年9月～12月である。アンケート調査は対面での受け渡しとメールで行い、ライフヒストリーインタビューは、対面及びスカイプ（インターネットを利用したテレビ電話）で行った。インタビュー方法は半構造化面接、1回1時間から2時間であった。

ライフヒストリーインタビューでは大学時代を中心に、聴覚障がいに関わる人生経験を尋ねた。個人の経験からいかにして社会的なものを取り出すかの試みであり、個人的な経験に留まらない語りを中心に掲載し、適宜筆者が注釈を加えた。また、これまでの活動記録や対象者とのメールも対象者の許可を得た上で引用した。

1.4 対象者との関係

筆者は2005年から現在まで学部生、大学院生、特色ある大学教育支援プログラム（以下、特色GP⁹）担当職員、非常勤職員、嘱託職員、非常勤教員として沖縄大学に関わっている。特に2005～2006年度は支援学生として、2007～2009年度は特色GP担当として、2013年度～

現在まで障がい学生支援コーディネーターとして聴覚障がい学生支援に深く関わっている。これらの活動の中で対象者と信頼関係を築き、ライフヒストリーインタビューを行った。

1.5 倫理的配慮

研究目的と内容、公表方法を明らかにしアンケート及びインタビューを行った。アンケートは内容や目的、個人が特定されない形で公表する旨を示し同意を得た後に依頼した。

インタビューは、内容、おおよその拘束時間、匿名での公表、録音、自由な参加と中断について伝え、同意を得られた者に行った。長くなる場合は1時間半で休憩を入れた。インタビュー後は逐語記録を作成し、対象者に確認してもらい修正や加筆を行った。後日、対象者へ「研究参加への同意書」を渡し、署名にて意思を確認した。

沖縄大学の障がい学生支援に関するデータは掲載内容を書面にて学生支援課に提示し、学生部、総務課など学内手続きを経たのちに掲載した。

1.6 先行研究

日本の高等教育機関における聴覚障がい学生支援の歴史について、浦部・岩田（2011）から見る。

1973年、文部省は「昭和49年度大学入学者選抜実施要項」で初めて身体障がい者の受験時に配慮するよう記した。1980年代になると聴覚障がい学生の在籍が増え、「友人のノートを見る」という勉強方法とともに、手話通訳やノートテイクが支援方法として始まる。しかし、学生団体や親しい友人によるサポートが中心であった。

その後、聴覚障がい学生や、学生団体の働きかけにより、1997年には、聴覚障がい学生が在籍する77大学のうち半数以上で何らかのサポートが行われるようになる。

日本学生支援機構による全国的な調査は2005年より行われ、高等教育機関に在籍する障がい学生の状況が明らかになった。聴覚障がい学生支援の全国状況について白澤（2005）は、約30%（237校）の大学・短期大学に聴覚障がい学生が在籍し、その半数でノートテイクによるサポートが行われ、ノートテイクを行っている大学・短期大学の約55%で職員のコーディネーターやノートテイクの養成が行われていることを明らかにした。

全国的には、1980年代に聴覚障がい学生支援の動きが始まり、1990年代後半から2000年代にかけて急速に普及したことが分かる。

沖縄大学の聴覚障がい学生支援については、横山（2007, 2013, 2015）、沖縄大学特色GP（2010）がある。

1980年代の風疹による聴覚障がい学生の在籍が前史として位置づけられるが、情報保障はなされなかった。開始期はコーディネーターの雇用や支援学生の育成など組織的な聴覚障がい学生支援が始まった2004年度と考える。

横山（2007）は、沖縄大学に在籍する聴覚障がい学生のライフヒストリーから沖縄大学の聴

覚障がい学生支援を考察した。そこで明らかになったことは、大学入学以前の教育機関における困難、大学で情報保障を受け人間関係を構築していること、そして卒業後への不安であった。

しかし、聴覚障がい学生の学生生活については様々な課題が指摘されている。杉中・土井・畠山（2010）は、支援体制が整備されたとしても支援学生との関係や技術に葛藤があり、聴覚障がい学生が自己葛藤しながら学生生活を送っていることを指摘する。そして、支援学生の共感的理解が重要であるという。しかし、支援学生との関係性においても課題があり、座主・打浪（2009）は関係の非対称を指摘し、両者に過重な負担がかかっている現実を明らかにする。

また、東野（2009）は、聴覚障がい者の困難は講義などの公的な空間よりもプライベート場面でのコミュニケーションであると言う。これは、聴覚障がい学生支援を講義のみならず学生生活全般を視野に入れることの重要性を指摘している。

先行研究の指摘をふまえ、本稿では沖縄大学の聴覚障がい学生支援の歴史を概観する。そして、聴覚障がい学生の学生生活を入学前、卒業後も含めたライフヒストリーインタビューを中心に考察し、今後の聴覚障がい学生支援の展望を見出すことを目的とする。

2. 聴覚障がい学生支援の歩み

2.1 1980年代

1964、65年に沖縄で流行した風疹¹⁰による聴覚障がい学生が、少なくとも1984年度に5名、85年度に4名入学した「横山（2013）」。1980年代に約10名もの聴覚障がい学生を受け入れたことは画期的なことであった。しかし、幾つかの大学で行われていたノートテイクや手話通訳「浦部・岩田（2011）」は、地理的、時代的な制約があり沖縄大学で取り組むことは出来なかった。

当時は障がい学生自身の努力を前提とした入学であり、板書の活用、ゆっくり話す等の配慮に留まっていた。長年風疹による聴覚障がい児の教育に関わった方がボランティアの相談役を担ったが、コーディネートの役割はなかった。情報保障がない中で大学生活を送ることは容易ではなく、休学や退学をする者もいた「横山（2007, 2013）」。

2.2 2000年代

約20年後、2002年度に聴覚障がい学生が入学し、後期から地域の要約筆記者による情報保障が一部の講義で始まる。しかし、組織的な取り組みには至らなかった。

2004年度に新たに聴覚障がい学生が入学し、委員会の創設、後期からコーディネーターの雇用（前期は学生のコーディネート）等、組織的な取り組みが始まる。沖縄県内大学とも連携し、2005年度には県内5大学による聴覚障がい学生支援をテーマとしたシンポジウム¹¹が開催される。

学内外で活動が活発になり、2007年度には聴覚障がい学生支援を中心とした教育プログラムが特色GPに選定される。この間も聴覚障がい学生が継続的に入学し、盲ろう障がい学生¹²の支援活動など、その時々状況に合わせて取り組まれた。

2.3 2010年代

2011年度からは肢体不自由学生への代筆支援¹³も始まり、2012年度には全盲の視覚障がい学生が入学するなど、支援対象が広がりコーディネーターも複数人体制となる。2014年度には聴覚障がい者がコーディネーターになり障がい者が支援を運営する役割を担う。

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（PEPNet-Japan、以下PEPNet）¹⁴の拠点校加入、同シンポジウムでの受賞、PEPNetと協力し県内大学ネットワーク構築など、県内外との連携も始まった。一方で支援学生の不足、支援学生と障がい学生のコミュニケーション、支援技術の問題など、課題も抱えながらの支援活動であった。

2.4 まとめ

沖縄大学の聴覚障がい学生支援を振り返ると、①1980年代の風疹による聴覚障がい学生の在籍期、②2000年代の組織的な支援体制構築期、③2010年代の支援体制の定着と発展期、の3期に分けられる。

①においては、聴覚障がい学生個人の努力の限界、②においては、情報保障と組織的な取り組みの必要性、③においては、聴覚障がい者が支援の中心に関わることと他大学との連携の重要性が明らかになった。

全国の状況と同様に沖縄大学の障がい学生数は増加傾向にあり、2005年度と2015年度の比較で障がい学生数は2.3倍、聴覚障がい学生数は1.7倍である（表1）。

表1 沖縄大学の障がい学生支援数と主な取り組み、全国の高等教育機関の障がい学生数

年度	沖縄大学				全国		主な出来事、取り組み
	障がい学生数	うち聴覚障がい学生数	コーディネーター数	支援学生数(登録者数、実働と異なる)	障がい学生数	聴覚障がい学生	
1980年代		9					風疹による聴覚障がい学生の在籍
2002		1			3		
2003		1			7		短期の支援者養成講座を開始
2004	11	2	1	42			コーディネーターの雇用(前期は学生が担う) 障がい学生支援委員会の創設(後に学生生活支援委員会統合)
2005	9	3	1	49	5,474	1,158	支援者養成講座をカリキュラム化(2005年度～2010年度開講)
2006	14	4	1	44	4,937	1,200	県内5大学のシンポジウム開催、ノートテイカー21名に学長特別賞
2007	12	5	1	34	5,404	1,355	特色ある大学教育支援プログラムに選定、聴覚障がい卒業生に人文学部長賞
2008	7	4	1	50	6,235	1,435	
2009	9	4	2	50	7,103	1,487	盲ろう障がい卒業生に嘉数昇記念賞
2010	7	4	1	54	8,810	1,537	
2011	10	3	1	31	10,236	1,556	肢体不自由学生への代筆サポート開始
2012	15	3	2	40	11,768	1,488	視覚障がい学生(全盲)の入学、コーディネーター2人体制
2013	15	4	2	62	13,449	1,609	聴覚障がい卒業生に嘉数昇記念賞
2014	17	4	2	52	14,127	1,654	聴覚障がい者がコーディネーター、日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク拠点校に加入、同シンポジウムにて「新人賞」
2015	21	5	3	60			コーディネーター3人体制 県内大学ネットワーク事業に取り組む

出典：日本学生支援機構(2006-2015) 沖縄大学特色GP(2010) 横山(2007)(2013) 沖縄大学学生支援課(2015)

図1 沖縄大学における障がい学生数聴覚障がい学生数の推移

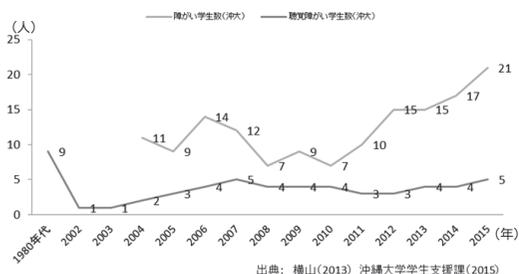
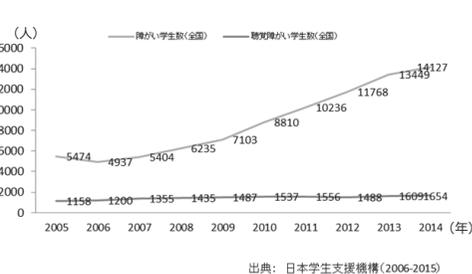


図2 全国の高等教育機関における障がい学生数と聴覚障がい学生数の推移



3. アンケート

3.1 アンケート概要

2002年から2014年までに沖縄大学に在籍した聴覚障がい学生12名のうち10名に聴覚障がい学生支援に関するアンケート調査を行った。実施期間は2014年9～11月、回答者は10代4名、20代5名、30代1名、男性5名、女性5名である。

3.2 アンケート結果(選択式) 巻末資料を参照

障害等級は2級が8名であるが、3級1名、障害者手帳を保持していない軽度難聴者も1

名おり、自己認識については「ろう者」「難聴者」「どちらともいえない」と多様である。出身高校は地域の学校からの進学が8名と多く、ろう学校出身者は1名であった。

コミュニケーション方法は口話、手話、筆談と様々なコミュニケーション方法を活用しており自己認識と同様に多様である。しかし、大学での情報保障については10名がノートテイクであり、手話通訳を利用した者は3名であった。地域の小中高校の授業における情報保障経験者は2名であった。

卒業生6名のうち就業者は3名、求職中、家事労働、その他が3名であった。就業率は50%であり、「身体障害者、知的障害者及び精神障害者就業実態調査」(厚生労働省(2008))における20～35歳の身体障がい者の就業率53.7%と近い値であった¹⁵。就業者のうち正規雇用は1名であった。

3.3 アンケート結果 (記述式)

記述式の質問項目では、「沖縄大学への進学理由」、「沖縄大学の聴覚障がい学生支援の良いところ」、「沖縄大学の聴覚障がい学生支援の課題」を尋ね、回答を分類した。

沖縄大学への進学理由は「情報保障、支援活動の充実」が最も多く、2006年以降の入学者は全員が理由に挙げていた。そして、「学科、専攻、資格」など勉学に関する理由が続く。

沖縄大学の聴覚障がい学生支援の良いところは、「情報保障、支援」、「人間関係」が多く、大学の取り組みや自身の成長等も挙げられている。その他、「コーディネーターがいること」、「支援学生が不安定であるが組織自体は崩れなかった」など大学の組織的な取り組みが評価された。「もし支援がなかったら大学を辞めていたり、引きこもり孤独な私になっていた」と、聴覚障がい学生支援が日常生活に影響していることが伺える意見もあった。

一方、課題として情報保障範囲の拡充や情報公開など「大学の取り組み」が挙げられた。その他、「支援学生数の不足」、「コーディネーター」についての言及もあった。また、「高校まで情報保障を受けたことが無かったため、ルール等全く知らなかった」と支援を受けることへの戸惑いもみられた。

更に、「小中高校、専門学校、短期大学などに入学してくる聴覚障がい学生の為に聴覚障がい学生支援を作っていくことが課題」と他大学、教育機関への広がりを展望する意見もあった。

表2 沖縄大学への進学理由 (自由記述を分類)

情報保障、支援活動の充実	6
勉学面の魅力(学科、専攻、資格)	4
取り組みたいことがあった	3
沖縄の魅力	2
大学の姿勢	1
立地	1
他大学に落ちた	1

(人)

「沖縄大学への進学理由」についての自由記述（一部）

- ・県内で一番障がい学生支援が充実している。つながりや情報を広めていきたかった。

表 3 沖縄大学の聴覚障がい学生支援の良いところ
（自由記述を分類）

情報保障、支援	5
人間関係	5
大学の取り組み（委員会、組織、講座）	4
コーディネーター	3
勉強会、定例会等の企画	3
周囲の配慮、理解	2
自身の成長	2
学生活動	1
教員	1

（人）

「沖縄大学の聴覚障がい学生支援の良いところ」についての自由記述（一部）

- ・コーディネーターを置いて放置ではなく教職員の支援委員会が定期的にあった。コーディネーターだけでは難しい問題もあるため、大学としての体制があったこと。ときどき障害学生、テイカーも委員会に加われた。
- ・定例会、手話勉強会、ノートテイク勉強会などをしっかり行っている。意見交換が出来る。人とつながる。

表 4 沖縄大学の聴覚障がい学生支援の課題
（自由記述を分類）

大学の取り組み（委員会、組織、設備）	5
自身の働きかけ、課題	4
支援学生の不足	2
マンネリ化	2
支援学生の技術や意識	2
コーディネーター	2
周囲の配慮、理解	1
聴覚障がい学生同士	1
支援学生との関係	1

（人）

「沖縄大学の聴覚障がい学生支援の課題」についての自由記述（一部）

- ・支援学生の人数が安定しない。1人テイクの時、情報量が足りなかった。
- ・コーディネーターに距離を感じることは支援を受ける上で問題がある。信頼関係を作ることが支援の前提である。

4. ライフヒストリーインタビュー

4.1 対象者の概要

4名の聴覚障がい学生のライフヒストリーインタビューを行った。いずれも在学中に聴覚障がい学生支援の中心的な役割を担った人物である。

対象者は女性2名、男性2名。障害等級は全員2級、聴覚障がい者としての自己認識は「ろう者」2名、「どちらともいえない」2名であった。学校歴は地域校が多いが、ろう学校在籍経験者も2名いる。4名とも多様なコミュニケーション方法を使う。掲載順序は在学時期にあわせた。

表5 ライフヒストリーインタビューの対象者概要

	Aさん (男性)	Bさん (男性)	Cさん (女性)	Dさん (女性)
在学時期	2000年代前半～中頃	2000年代中頃～後半	2010年代前半～中頃	在学中
障害等級	2級	2級	2級	2級
自己認識 (ろう者、難聴者、どちらともいえない)	どちらともいえない	ろう者	どちらともいえない	ろう者
学校歴 (小学校) (中学校) (高校)	地域校 地域校 地域校	地域校 地域校 地域校	地域校 地域校 ろう学校	地域校 地域校・ろう学校 地域校
主なコミュニケーション方法 (使用頻度順)	口話、筆談、通訳	口話、手話、メールSNS	口話、手話、メールSNS	手話、口話、筆談

4.2 Aさん

沖縄県外で生まれ、現在20代後半。主なコミュニケーション方法は、口話、筆談、通訳。聴覚障がい者としての自己認識は「ろう者とも難聴者ともいえない」である。

大学卒業後、当事者団体での5年間の仕事を経て、現在はプロボクサーになるため修行中である。

Aさんは髄膜炎のため1歳半で完全失聴。ろう学校幼稚部の教員や言語聴覚士から言語訓練を受け、口話を身に付ける。作文や朗読等の母親との言語訓練は小学校時代まで行われた。

地域の小学校では、担任がキョードスピーチや筆談等を使いAさんとしっかりコミュニケーションを取ってくれた。担任の影響でクラスメイトもAさんと積極的にコミュニケーションを取ってくれ、楽しい小学校生活だった。

「学校だったら先生、友達やグループの中ならリーダーが僕とのコミュニケーションを大事にしてくれるかどうか。それだけでグループの中に僕が入れるかが決まる」 「障がい原論 (2010) pp5」

しかし、少し離れた私立中学に進学したため、今までの人間関係がなくなった。クラスメイトに話しかけるが、Aさんの発音に慣れていないため距離が出来てしまう。先生の話も全く分からず友達もできなかった。

大学生や地域の要約筆記者、そしてクラスメイトによるノートテイクや要点メモによるサポートが始まったが、Aさんは情報よりも人間関係を求めている。中学校での孤立は解決しなかった。

「自己主張が照れくさいという壁だけでなく言葉が通じないという壁、みんなとの壁がすごく高くて、主張できないまま卒業しました。もうその時は学校コンプレックスだった」「同掲書pp6」

私立高校に進学するも、コミュニケーションと人間関係の壁は高くAさんは中退する。

その後、障がい者（主に車椅子使用者）がバリアフリーを訴えて旅をする企画に参加したことが転機になる。旅をしながら寝食を共にし、毎晩の議論のなかでAさんも刺激され、これまで考えていたことを話すことが出来た。そして皆が聴いてくれたのである。

「こういうコミュニケーションの関係が今までに無かった。すごくうれしくて。（略）障害者が遠慮せず堂々と真剣に考えて発言する、という姿は衝撃だった」「前掲書pp6」

旅を終えたあと、親の勧めで大学進学を目指す。進学先は親から離れられることとボクシング文化が盛んなことを理由に沖縄を選んだ。Aさんはボクシング好きでボクサーになりたいという夢も持っていた。差別を受ける黒人の中から生まれたスポーツであることも惹かれるところだった。

大学の面接では入学後のサポートについて尋ねられる。Aさんはノートテイク支援が必要であることを伝えた。大学もサポート体制整備に前向きであり、入学後に学科会議や講義で自己紹介や支援学生募集の機会を作ってくれた。Aさんは大学生活に馴染んでいく。

後期からは障がい学生支援コーディネーターの雇用も決まり、「ノートテイク講座」¹⁷も開講された。

「中学校と高校の失敗があったから、大学に行くときにノートテイクをしっかりと受けようって気持ちを持っていましたが、友達をつくることとか、そんなことはあんまり期待していませんでした。でも結局ノートテイクをしっかりと受けて、ノートテイク関係の人に限られたけど、友達が出来たのは予想外のことだったと思います」

学内体制がつくられ、講義におけるサポートはほぼすべての講義で行われた。支援者養成

講座、当事者団体の活動、さらには聴覚障がい以外の活動にも関わり、仲間にも恵まれ少しずつ自己主張ができるようになった。

「僕が考えたことじゃないけど、こういうふうに進めていこうってやってくれました。最初から結構しっかりやっていけたなと思っています。ありがたいことです。 (略) 自信が持てないまま大学に入りましたが、僕の話に凄く聴いてくれる。僕の居場所ができて、その種を思いきり伸ばすことができました」

しかし、講義時間以外のプライベート空間でのコミュニケーションは難しかった。

「休み時間にみんなと話すことはできない。その時はノートテイクがないから。どうしたらいいんだろうってずっと思っていました。ずっと引っかかっていることでした。

でも、大学がやることは授業の情報保障をしっかりやる。それは分かるけど休み時間をどうしたらいいのか、それは僕の問題だから (略) 気になったり、考えたりしていました。結局答えは出ませんでした」

ある時、学生の保護者が話しかけてきた。Aさんは筆談をお願いしたが断られ、ノートテイクに通訳するように言われた。

「その時僕はショックを受けました。『自分で伝える努力をしないのか』って。でも今は分かります。書くことが苦手な人、難しい人っているって、このときのやり取りが教えてくれたなって思いました。 (略) プライベートな時に通訳を使うのもひとつの方法だなんて、思うようになったきっかけでした」

しかし、社会福祉士の現場実習はノートテイクを利用しないで行った。情報保障を受けながら仕事をするイメージが持てなかったのである。

「先生から『ノートテイクを使って実習を行うか』って提案を受けました。でも僕は断りました。どうしてかっていうと、働くときノートテイクをつけるなんて考えられなかったからです。 (聴こえる人と) 全く同じ条件で実習を受けようって思ったので、実習に通訳なしで行きました。でも結果は全然うまくいかなくて、朝の朝礼から分かんなくて、 (略) その時の失敗が今も心に残っています」

卒業後、通訳制度を改善し聴覚障がい者の自立をサポートする団体の立ち上げに誘われ、職員として参加することにする。

Aさんは大学での経験から情報保障の必要性和通訳制度の課題を感じていた。この団体はプライベートな場面でも通訳を利用出来るようにし、聴覚障がい者の社会参加を目指していた。

「家族で大事な話があっても後回しにされ（略）飲み会に行ってもみんなと話することができないからトイレに行って時間を潰してくるとか、食べることに集中するとか、そういう問題をよく聴いています。

みんなそう言っているので、みんな困っているということです。そのための通訳が使えるように」

コミュニケーションの問題は聴覚障がい者のみならず聴者の問題でもあるが、Aさんは聴覚障がい者の困りごとを中心とした活動と考えている。

「大人数の中で聴覚障がい者が僕ひとりで参加している時に、僕に伝わらなかったから困ったという聴こえる人はほとんどいません。（略）実際問題として困っているのは僕たち当事者です。通訳を使う人は僕たちが主体だと思っています」

聴覚障がい者の深いニーズに応えた取り組みであるが、プライベート空間に第三者が入ることのためらいや費用負担¹⁸が少なくないことから利用頻度はそれほど高くなかった。行政の反応も芳しくなく活動は必ずしも順調ではなかった。

「通訳を使ってコミュニケーションをとるって考え方をみんなに伝えるのがとても難しく、（略）すぐに受け入れられにくいなって思いました」

Aさん自身も大学生の頃はプライベート空間における通訳利用は考えたこともなかった。

「大学にいた時の僕は、授業での情報保障が必要って考えていましたけど、それ以上のことは考えていなかったんです。考えてなかったっていうか、どうしたらいいか分からなかったです。プライベートの時に通訳を使う発想がまだなかったです。（プライベート空間でも）保障が必要だと考えていたら、大学の時からそういう活動をやっていたと思います」

現在Aさんは、夢であったプロボクサーになるため海外で修行を積んでいる。日本のボクシング界には聴覚障がい者の欠格条項があるためである¹⁹。

日本からボランティアの通訳者とともに修行に励んだが、通訳者がいないとコミュニケーションが難しくボクシングに身が入らなかった。

「日本人が固まっているのを見たりすると、結構動揺しました。(略)それでコミュニケーションが取れないってことで、そういうことで参ってしまいました」

2か国目では、日本人宿に宿泊しながら通訳を使わず修行に励んでいる。ここでもコミュニケーションの課題があるという。

「家族の食事も日本人宿での食事も僕にとっては同じなんです。家族は僕のことを家族だと思っっていると思います。宿の日本人も仲間だと思っっていると思います。そう思ってくれている気持ちは分かるけど、伝わっているんだけど、でもやっぱりなんか話すことができていない。みんなとの会話を共有することができていないから、本当のところ心は遠いなって思っっています」

家族であっても旅人同士のコミュニティであってもAさんの孤独感は深い。私たちはこの現実にどのように向き合えばよいのか。Aさんは、「困っているのは聴こえない人であり、聴こえない人の課題である」と言うが、聴こえる人の問題として捉えられるようにならないとコミュニケーションの問題の本質がみえてこない。「通訳制度の充実」がAさんの出した答えである。

4.3 Bさん

沖縄県出身、現在20代半ば。主なコミュニケーション方法は、口話、手話、メールSNS。聴覚障がい者としての自己認識は「ろう者」である。

大学卒業後、求職期間を経て聴覚障がい者等への遠隔情報保障の企業で働いている。現在2年目、主な業務内容は文字通訳のサポートや社内での手話講師である。

Bさんは先天性の聴覚障がい。ろう学校幼稚部の教員や言語聴覚士から言語訓練を受け口話や文章力を身に付ける。外で遊ぶことが好きで腕白な子どもだった。

ろう学校の幼稚部を経て地域の小学校に進学するが、具体的なサポートはなく一番前の席に座るくらいであった。友達関係も容易ではなかった。

「もうとにかく遊びまわっていた。勉強よりも遊びが好きで体動かすことが好きな少年。それ故によく人とぶつかることもあったけど。(略)喧嘩したときは『どうして』って言われたけど、上手くどう話していいか分からず話せなかったこともあり、よく分かんなかった」

学校ではトラブルが重なり落ち込むことが多くなった。母親の勧めで難聴言語学級のある小学校へ転校する。環境が変わり落ち着いて学校生活が送れるようになった。

そのまま地域の中学校へ進学したが、情報保障はなく勉強の困難は変わらなかった。

「教室の一番前の席に座って、先生の口の見える位置に座らせてもらって板書も見えるように書いてもらう。それくらいのサポート。(略)一番困ったのは国語の教科書の朗読。あれが一番困った。(略)今どこですかって確認して。どこ読んでいるか分からないから、自分で先に全部読んで、当てられたときに『今ここだよ』って先生や、友人に教えて貰って、高校に上がっても変わらんけどそういうスタイルで」

高校は憧れの聴こえない先輩が卒業した学校へ進学する。しかし、高校も満足な学校生活ではなかった。

「難しいね、勉強も難しくなるし、人とのコミュニケーションもかなり色々な人が入るから難しく感じたけど、まあなんとか。自分的にはあまり積極的にやるようなことは出来なかったかな。(略)自分の世界に入って楽しめる本ばかり読んでいた。(略)全く今の生活と逆で。本が友達みたいな」

高校卒業後は大学進学を考えていた。沖縄大学に聴覚障がい学生のサポートがあると聞き、受験し合格する。その後、Bさんの高校に沖縄大学の「ノートテイク講座」の講師が会いに来る。Bさんは筆談の必要性を感じなかったが、その方は筆談を使いながら会話を進めた。

「『いやいや、いいですよ、私は口元を見て話すことができるからこんなことはしなくていいよ』って言ったけど、そのまま書き続けていて。

ノートテイクはこういう活動をしているって、具体的に分かってきて、入ってみたいっていう気持ちがより強くなったことを覚えています」

そしてBさんの大学生活は始まる。

聴覚障がいの先輩に会い手話を覚え、当事者団体にも関わるようになり人間関係が広がった。

「毎日が面白いし、青春してるなーってすごい毎日毎日が充実していて、そのきっかけになったのが聴こえない先輩。もうすごい人だったから、カリスマ性もあって、サークルもまとめていて、この人についていけば面白だろう、色々学べるって、ついて行っていましたね」

初めて受けたノートテイクも衝撃的だった。授業のイメージが大きく変わる経験だった。

「もう、180度変わりましたね。世界観、価値観が。もう、これまで受けていた授業ってイメージが、もう100%変わって、先生ってこういう話していたのか、と。授業だけの話じゃなくて、

何ていうの、雑談。先生が余談を取り入れたりとか、あと今こういう音が聞こえる鳴っているよとか。

こんなにも情報があるのって。ノートを取るのがいっぱいいっぱいで。気がついたら、一つの授業で5ページくらい使っていたりとか。それくらい手が痛くなるくらいの、もう毎日が授業が楽しかった。

初めてみんなと一緒に参加しているんだって、実感がすごく大きく感じて、すごく楽しい日々ではありましたよ。今まで受けたことのない世界で」

支援学生との付き合い方も、聴覚障がい先輩のやり方を見て覚えた。他大学の聴覚障がいの先輩からも「やってもらうばかりではなく、自分も何ができるか考えなさい。テイカーはモノじゃないよ」とアドバイスもらった。

3年生の時には国内交換留学制度を使って内地の大学で学んだ。聴覚障がい学生の団体に関わり様々な聴覚障がい者と出会い、視野が広がった。

「自分の意見をしっかり言えるし。意識もしっかり持っていて、とにかく行動も積極的で、(略)すごいな—って考え方が変わった。

手話も勉強して盗んで貪欲に日本手話も学びたいって思うようになったし、ASL (American sign language アメリカの手話) って言葉も初めて知ってすごく手話って世界が深いなって思ったり、すごい濃い一年間だった」

沖縄に戻り、聴覚障がいの先輩からろう学校の教員になるようにアドバイスがあった。そこで、1年間科目等履修生として残り教員免許取得を目指した。教育実習はろう学校も勧められたが自分の力でどこまでできるか試したかったため地域の中学校で行った。手話通訳もついたが容易な経験ではなかった。

「先生になるのは不可能ではないってことがわかった。ただ一番の問題がコミュニケーションっていう大きな壁があって。教える分には問題はないんだけど、質疑応答が一番苦しかった。手話通訳もそのときに付いていたけれども、厳しかった。(略)大きな経験、大変だった。今の自分ではやりたくないと思う。でも、今はこれでいいかなって」

教員免許を取得し、卒業したが仕事のイメージが掴めなかった。何をやったらいいのか、どんな仕事がやりたいのか分からなかった。ハローワークの対応も悪く足が遠のいてしまった。そして家に籠ることが多くなった。

「ゲームして、ドライブして、家で過ごしての繰り返しで半分ひきこもり。何かを大きな

ことをしたいと思うほど働きたい気持ちもあったけど、どうしていいのかわからなくて、ハローワークももう行きたくなかったし」

半年ほど厳しい状況が続いたが、ある日ふとハローワークに行く。するとタイミング良く聴覚障がい者等への遠隔情報保障の企業の求人があり、すんなりと採用された。

現在の仕事は文字通訳のサポートと社内手話講座の講師である。社内の風通しも良く、聴覚障がい者も働いており働きやすい環境である。

大学で聴覚障がい学生支援に関わっていなければ現在の仕事に巡り合っていなかったという。

「とにかく充実した大学生生活が為になったし、友達もいい先輩に恵まれたし、今のつながりも大学の頃のが多いし。もう青春。高校ではできなかった青春が大学でできた。そういう大学での経験がきっかけで今の会社に入れたから」

大学1年生の頃Bさんはテレビの取材で「ノートテイクってあなたにとってどういったものですか」と質問を受けている。その時は「耳の代わりになる鉛筆です」と答えた。現在のBさんにとって情報保障は更に大きな意味があるという。

『耳の代わりになる鉛筆』って見たままに言っていたけど、時代によっては変わるね。今は『人生にとって大事なサポート』かな。情報保障が無ければ分からないことがもちろん多いわけだし。字幕とかテレビに出ているのも情報保障だし、人生のライフスタイルに入っているわけですよ。『人生にとってのかけがえのない存在』、今いいこと言ったなあ」

大学時代の支援経験のみならず人間関係が、その後の人生に影響を与えているものである。情報保障も単なる通訳ではなく日常に欠かせないものとしてBさんの人生の一部になっている。

4.4 Cさん

沖縄県出身、現在20代前半。主なコミュニケーション方法は、口話、手話、メールSNS。聴覚障がい者としての自己認識は「ろう者とも難聴者ともいえない」である。

Cさんは大学卒業後、大学の障がい学生支援コーディネーターとして働き、1年目である。

Cさんは1～2歳の頃に聴覚障がいがかかる。家族で離島から沖縄本島に移住し、ろう学校の教員や言語聴覚士から言語訓練を受ける。家庭でも母親による言語訓練が行われた。屋外で遊ぶことが好きで、障がいの認識はなかったが箱型の補聴器を使っていたため、友達との違いを何となく感じていた。友達の話が分からなくて困ったこともあったという。

「ちょっと困ったことがあって、内緒話、分からない。『分からないから口見せてー』って言ったら、『口見せるのー』って言われて難儀だったのはあります」

この頃よりFMマイク²⁰の使用を始める。地域の小学校に進学し、難聴言語学級にも通う。授業が分からない時もあったがなんとなくやり過ごしていた。

「音読の時間が嫌でした。順番が分からないから。マイクの音は先生の声だけで、周りの音が入らないんですよ。だから（同級生の）質問が分からなかったです。（略）分からないままです。良くないですね。でも、分からんのは分からん、で終わっていました。

『もう一回教えて』って言うこともできなかつたし、言おうとも思わなかつたし。内容によっては自分で調べたら分かるからいいや、みたいな」

難聴学級は少人数で人間関係に限られ、居心地は良くなかった。同級生と同じように授業が受けられず違いも意識した。

「みんなと同じように授業を受けられない。その時間だけ抜けるので自分だけ違うんだっていうのはこの頃にははっきりしました。嫌だった。サボったことがあります。何回か。知らんふりして。難聴学級から帰ってきた時が嫌でした。みんなは勉強が進んでいるし、ああ自分は取り残され感があるーって」

地域の中学に進学し、小学校と同様にFMマイクを使いながら学んだ。勉強も難しくなり音声は入るが意味を完全に理解することはできず、勉強も苦手になっていた。更に友達とのコミュニケーションは授業以上に難しかった。

「3名から4名以上のグループで話し合ってた時には大変でした。誰が何を話しているのかつかめないし、周りがガヤガヤしているので。

決まったことだけ教えてもらえればそれでいいやって感じになっていました。流れはいいやって。（略）信頼できる友達とか話の内容を教えてくれる友達がいるならそこに行く、みたいな感じです」

高校はろう学校に進学する。聴こえの配慮がある環境を望んでのことだった。しかし、期待通りの高校生活ではなかった。ろう学校の雰囲気にも馴染めなかった。

「学校に行ったら『おはようございます』、帰るときは『お疲れ様、さようなら』ってあると思うんですけどそれがなくて。これ（手をあげて）で終わり。先生も挨拶をしなくて、生

徒たちがなあなあにされてるんです。なあなあで済まされている雰囲気は嫌でしたね。それに浸っていく自分も嫌でしたね」

Cさんは音声を主なコミュニケーション方法としていたため、手話やろう文化にも馴染めず衝突することもあった。

Cさんは、ろう学校という聴こえない世界では、「聴こえる世界に近い存在」として過ごし、聴こえる世界の自宅では、「聴こえない世界に近い存在」として過ごし、聴こえる世界と聴こえない世界のどちらにも所属感が持てなかった。

「自分は聴こえなくても補聴器をつけて音に頼るって生活を結構してきたわけだから、声使わないっていうのは本当に何ていうんだろう。(略) だからろう学校にいるのが苦痛でした。で、家に帰ると自分は何なんだろうなって考えて」

人間関係もうまくいかず悩みも多かった。また、大学進学を目指していたため、他の生徒と異なるカリキュラムが組まれたことも同級生との距離を生んでいた。Cさんは学校の期待に応えて大学進学をしなくては、とプレッシャーを感じていた。しかし、県外の大学に落ちてしまい聴覚障がい学生支援が充実している沖縄大学に進学する。

ノートテイクを受けるのは初めてだったが、文字情報による情報保障は安心できた。

「目で情報を確認できるので、今まで『こう言っているのかな』っていう不安が確信に変わるので、確信が安心につながってホッとしました。内容も分かるようになったし、すごい助かりました」

しかし、支援を受けることに慣れておらず、支援学生との距離の取り方や付き合い方に戸惑いがあった。先輩の聴覚障がい学生との付き合いもほとんどなかった。

「緊張しました。両隣に人がいて見られるじゃないですか、何か変なプレッシャーも感じていました。(略) 支援学生に支援技術のことを教えたかったけど、自分も初めて情報保障を受けるので伝えられなかったですね。だからそんなに多くは語らずにみたいな関係で終わり。(略) 中学生の時みたいな感覚を取り戻すのに時間がかかりました」

ある支援学生がCさんの支援に入ることが多かったのだが、次第に疎遠になり離れてしまった。友達関係と支援関係を両立することは容易ではなかった。

この頃は講義と家の往復だったため、大学生活に物足りなさがあったが、2年生の時に「聴覚障害学生エンパワメント研修会²¹」に参加したことが転機となった。全国の聴覚障がい学

生や先輩と出会ったのである。

「(似たような経験をしている聴覚障がい学生が) いましたいました、いっぱいいました。普通の学校にいて授業がわからなくて苦労したとか。そういう経験はインテグレーション経験者はあるんですよね。分かる分かるってお話が出来ましたし、研修での話し合いも自然にできたんですよ。それが良かった」

研修から戻り、CさんはFMマイクの配慮願い資料を作成し教員に配布する。教員のみならず支援学生の反応も好評だった。そして、3年生になり沖縄大学に在籍する障がい学生の交流を目的とした集まりを作る。

「集団でやる楽しさを知りました。一緒に何かをするっていうのは本当に楽しいですよ。一緒にドライブに行って、ご飯食べて、海眺めてって。本当に楽しかったです。楽しいことばかりではなかったですが」

後に聴覚障がい学生支援のサークルと合併し、障がい学生の交流を目的としたサークルとなる。グループでの会話が盛り上がった時に付いていけないことはあるが、要望を言えるようになった。

「『ごめん分からなかったから教えて』って少しは言えるようになりました。みんな自然と配慮し合うので、聴こえない学生がいたらゆっくりしゃべろう、車椅子学生がいたらお店を考えようとか考えるので」

しかし、グループでのコミュニケーションは親しい関係のサークルでも課題だった。

「心苦しいかもしれないけど盛り上がりそうになったら『ストップ、(FM) マイク』って。自分がその場の流れを作るしかないのかな。この人が発言しそうだからマイクって」

それでも難しい場合は後で教えてもらうことも一つの方法と考えている。

「そうするしか選択がないと思います。聴こえない人にとっては、そこはやっぱり障がいのために悔しいことですけれども。悔しいけど仕方ないんです。だからそこで割り切るしかない。後で教えてもらうって決めるしかない。(略)何かいい方法があればいいんですけどね」

試行錯誤しながらコミュニケーション方法をサークル内に広めた。そして、卒業論文では、

聴覚障がいの活動を始めるきっかけとなった「エンパワメント²²」をテーマに執筆した。それは大学生生活でエンパワメントされた自身の経験を振り返ることであった。

「4年間本当に楽しかった。色んなことを学びましたね。本当にいい時間を過ごせたなって思います。良かったです本当に」

Cさんの活躍は多くの人に認められ、卒業時に嘉数昇記念賞²³に選ばれた。そして、障がい学生支援コーディネーターとして働くことになる。障がい当事者がコーディネーターになることは、沖縄大学として初めてのことであった。

「(コーディネーターの)話をもらった時は本当にびっくりしました。こんな、いいのって。それと同時に責任というかプレッシャーを感じました。

初めて沖大で聴こえない人がコーディネーターやるわけだし、すごい考えすぎなんですけど、自分がしっかり仕事ができるんだってことを聴こえる人たちにアピールしないと、『ああ障がいだからできないんだ』とか『障がいだから』っていう理由をつけたくなかったんですよね。聴こえる人たちに」

講義のサポートに入れないために葛藤もある。学生との距離の取り方など難しさもある。日々試行錯誤しながら仕事に心を込めて取り組んでいる。

「心苦しいっていうか、サポートが足りない時に実際の現場には入れない。それがすごい自分の中で悔しい。本当に申し訳なくて、申し訳ないって思うならほかのところで還元できないかなってすごい考えるんですよね。だから手話勉強会とかをしっかりとって」

しかし、職場のコミュニケーションにおいて、会議は情報保障があるため付いていけるが、日常場面は容易でない。

「休憩の時とか3人くらいまでならまだ大丈夫なんです。けど、一気に6人とかになると、あの時は本当にもうついていけないっていうのが分かっているの、新聞を読んでしまうんですよね。ギリ3人だなんて。自分を入れて。3人で話ができるかどうか。課題ではあります職場でのコミュニケーション。(略)普段はそんなに意識しないんですが、あの時は自分の障がいを意識してしまいます」

Cさんは高校時代、居場所のなさを感じていたという。聴こえる世界と聴こえない世界、どちらにも所属しきれなかったため、居場所を見つけることがテーマであった。

大学時代にサークルを作り、中心的な役割を担い共に活動していく中でCさんのコミュニケーション方法を広め、人間関係を構築した。しかし、新たな人間関係では、また新たな取り組みが必要になる。

3.5 Dさん

沖縄県出身、現在10代後半。主なコミュニケーション方法は、手話、口話、筆談。聴覚障がい者としての自己認識は「ろう者」であり、沖縄大学に在学中である。

Dさんは離島で生まれ、その後沖縄本島に移住し、ろう学校や病院で言語聴覚士から言語訓練を受ける。ろう学校は友達も多く楽しかったが言葉の訓練は嫌だったという。家庭では母親と絵日記等を使い日本語の使い方を覚えた。

地域の小学校へ進学し、難聴言語学級に通級しながら通常学級で学んだ。友達の簡単なサポート以外のサポートは特になく、先生が何を言っているか分からなかったが、黒板を見ながら学んだ。

水泳の時に友達と話すため指文字を教えたことからクラスに指文字が広がり、他のクラスにも広がった。日常会話でも指文字が広まり、朝礼や講演会の時は隣で教員が筆談をした。

「水泳中は話も聴こえないから、『指文字を覚えてー』って言ったの。スイミングの時に教えて授業中も指文字で話していた。みんなが見て何それって言われて。みんなが興味を持ってクラスに広まって、隣のクラスにも広まって。同級生ほぼ全員覚えた。今も覚えている。だから、小学校は恵まれていた」

そのまま地域の中学校に進学する。クラス編成の際の希望調査や、難聴学級の隣に通常学級を置くなど学校も配慮した。Dさんは指文字が上手な同級生と同じクラスになった。

しかし、中学校では指文字は広まらなかった。先生の話も分からず成績は急降下する。成績の異変に難聴学級の担任も驚き、地域の要約筆記者による要約筆記のサポートが始まる。しかしDさんは馴染めなかった。

「普通クラスでは国語だけ要約筆記の人に来てもらって、やっていたけど(略)本当に嫌だったな。まったく知らない人だから。(同級生の)視線を感じたし。要約筆記が来る科目だけ一番うしろの席に移動して。気まずい。みんなと一緒に普通に受けたいのに、この頃は言えなかった。言うのが恥ずかしかった」

中学校では女子グループの付き合いの難しさから友達関係も上手くいかなかった。この頃には部活も辞め学校にも行かなくなっていた。目で分かる世界があるろう学校へ行きたかった。

「グループが決まっていて、グループに入ったらダメとかあったし、(略) だから中学校の時は男の子に生まれたかった、障がいでもいいから。障がいでもいいから男の子に生まれたかった。(略) 何にも(情報が)入ってこない上に、そういう苦しみ嫌だったからろう学校を選んだ。ろう学校は見て分かる。だからいいなって思って。毎日笑ってられるし、心から笑えるのはこっちじゃないかなって」

体験入学を経て中学校生活の途中からろう学校へ転校することになる。情報が分かる環境に安心できた。

「今も覚えているんだけど、中学校の始業式、最初の日はドキドキしていたよ。(略) その頃は手話がわからなかった。指文字しか分からなくて、だからめっちゃ苦勞した。思うように手話が読み取れなくて苦勞したけど、面白かったな。何だろう。よく笑っていたよ」

生徒同士の喧嘩もあったが、話していることが分かった上での喧嘩なので対等なものだった。

「ろう学校で中学校と違ったのは、言葉の、日本語力に差があったから。『あの人は威張っているよな』っていうのがあった。全員ではなかったけど、すぐには言えなかったけど、手話を使って自分の気持ちを伝えられるようになってからは、(略) 喧嘩、トラブルになった」

Dさんは地域の学校で過ごし文章に触れる機会が多かったため文章力が身についていた。他の生徒と文章力や学力に差があった。Dさんは文章力の必要性を訴えたが周囲の生徒に理解されなかった。

卒業後、ろう学校高等部に進学するか地域の高校に進学するか悩んだが、地域の高校への進学を決める。

「中学校の時みたいに嫌なことがあるんじゃないかって思ったわけ。だったら普通高校じゃなくてろう学校にしよう、でもやっぱり普通高校がいいって、行ったり来たり悩んで最終的に決めたのが、どっちみち社会に出たらやっぱり自分から行かないといけないから今のうちに変えよう、自立していこうって、普通高校を選んだ」

しかし、授業が分からなかった。参考書や塾で勉強していたため成績に問題はなかったが、精神的には限界だった。Dさんを取り上げた新聞記事を見た教員が筆談を使いながら授業を行ったこともあったが学校全体には広がらなかった。

「やっぱり精神的にも限界だったわけ、1年の終わり頃は。でも先生達は私の気持ちも分

からなかったと思うわけ。言わなかったし。(略)自分で勉強したから分かるけど、そうでなかったら分からない。そういうことを伝えられなくて、悩んで悩んでそれから先生に相談したわけ。(略)『学校行きたくない』みたいな。中学校に戻ったみたいな感じで自分が悔しくて」

そんな時にある教員がiPhoneとiPadを活用した遠隔情報支援を行う企業²⁴があることを見つけ、Dさんはモデルケースとして費用負担なしでサービス提供を受けることになる。初めての本格的な情報保障にDさんは驚いた。

「初めて先生の話が95%以上理解できて、こういう話をしているんだって、一気に視野が広がった感じ。先生は教科書通りに話しているんだろう、つまらないんだろうと思っていた。最初は、だけど、教科書だけでなく世間話とか雑談も通訳として入っていたから、先生はこういうこと言っていたんだ。こういう出来事があったんだ。だからみんな笑っていたんだとか、自分も一緒に笑うことができ嬉しかったよ」

1科目から始まり、最終的には4科目で情報保障が行われ、数学の場合は事前に数式を教員から会社へ送る等の調整をしていた。

その後、Dさんは講演会でも情報保障を希望するようになり手話通訳も実現した。少しずつ自身のニーズを伝えるようになってきたのである。

「今までの人生、小学校、中学校があって、また嫌なことがあるかもしれないって覚悟して普通高校を受験して、やっぱりいろんな人に出会ってから、気持ちを言うことが大切なんだって分かった。

これにはすぐに気づくことが出来なかった。長い時間がかかったわけ。9年くらいかかった。9年、10年。自分の経験を通して自分が変わることができるんじゃないかって。相談できる先生がいたからかな」

同級生との関係も作ることができた。Dさんが無意識に手話を使っていたことから手話や指文字を覚える友達も多かった。グループでの会話は難しかったが「分からない」と伝えられた。そして、Dさんは聴覚障がい者にとって情報保障は無くてはならないものであることを実感したという。

「(グループでの会話は)難しかった。こういう時は『またかよー』って思った。苦しいこともあったよ。あったけど、一回きいてみようと思って、『ねえねえ何の話?』って言ったわけ。そこから『ああこういう話、へー』みたいに。そうなんだって。1回やると2回目、

3回目もできるようになるから。だから1回目は大きな勇気が必要。1回やれば、2回3回目は慣れてくる。そのなかでやっぱり聴覚障がい者は情報保障が本当に大切だなんて思うようになった。高校の時」

卒業後、県外への進学も考えたが、県内で情報保障が充実していると聴いた沖縄大学に進学する。情報保障は高校で受けていたため戸惑いはなかったが、隣に支援学生が座ることに慣れなかった。

しかし、支援学生と一緒に大学生活を楽しみたい。そして支援学生不足などの沖縄大学の課題や県内の聴覚障がい学生支援のために活動したいと考え、県内の聴覚障がい学生団体の代表としても活躍している。

「もっともっと支援だけで終わるんじゃなくて、一緒に大学生活を楽しみたい。沖縄だからできると思うわけ。沖縄は狭い島だからこじかないし、友達の友達でそっからつながりができる。大学に入学して、経験してから沖縄の良いところがあるなって気づいた」

そして、聴覚障がい学生支援は教員を含め、多くの協力が必要だという。

「支援学生だけでなく大学の全体で、大学の支援のことを理解するわけ。やっぱり高校の時も似たような感じに、支援に協力してくれる先生が1人2人ではうまくいかない。

やっぱり全体の人が納得できるように、見てもらえるように、意識してもらうためにどうするのかっていうのが今の課題じゃないかな。こんなにすごい情報保障があっても、優しい先生、ちゃんとやってくれる学生がいても、一つにまとまらないと上手くいかない。(略)情報保障も大学だけではなくて、高校や中学校にも少しずつ広めていきたい。障がい者だけでなく健常者もちゃんと現状を理解した上で、お互いが助け合う社会にしたい。(略)だから障がいだけにこだわらなくて、もっと幅広く見て聴いて学んでそれで成長していきたいなって」

しかし、大学でもコミュニケーションの課題があるという。聴覚障がい学生支援について考える集まりの際もグループの会話に取り残されることがあった。サークル活動でもグループの会話が難しいことがある。課題もやりがいの感じながら大学生活を送っている。

そして、Dさんは、将来聴覚障がい者と聴者が共に暮らしやすい社会をつくる仕事に就きたいという。これからの聴覚障がい学生支援を担う世代である。

5. 結果、考察、課題

5.1 考察

沖縄大学が聴覚障がい学生支援に取り組み約10年、継続的に聴覚障がい学生が入学するようになった。この間の取り組みで情報保障の必要性がはっきりした。情報保障が整う中で聴覚障がい学生は安心して学び、豊かな人間関係を構築することができるのである。情報保障が始まった2002年から聴覚障がい学生の退学者がいないことは特筆すべきであろう。

そして、コーディネーターの重要性も明らかになった。杉中・土井・畠山（2010）が言うように聴覚障がい学生は葛藤しながら学生生活を送ることが多く、座主・打浪（2009）が指摘するように、聴覚障がい学生と支援学生の関係性は非対称である。関係の非対称や葛藤を調整する役割としてコーディネーターの存在がある。コーディネーターなしに聴覚障がい学生支援の継続的かつ良好な運営は難しい。

そして、横山（2007）では見られなかったことだが、高校でも情報保障が始まったことを確認した。Bさんが大学で初めて支援を受けた時の感想と、Dさんが高校で支援を受けた時の感想がほぼ同じであることが印象的である。大学での取り組みが始まり10年、情報保障が高校以下へと広まりつつあることを確認した。

また、インタビューをした卒業生3名は全員聴覚障がいに関わる仕事に従事していた。いずれも聴覚障がい者の大学進学や社会進出に伴い必要とされるようになった仕事である。学生時代の経験を活かし、聴覚障がい者の新たな仕事を作り出したといえよう。就職率は同年代の身体障がい者とはほぼ同率であったが、自身の障がいに関わる仕事をしていることは注目するところであり、聴覚障がいの当事者としての問題意識の高さを確認した。

5.2 課題

聴覚障がい学生支援が定着し、その在籍数の増加に伴い支援学生の不足がみられるようになった。一定数の支援学生は支援活動の安定維持になくてはならないものである。また、支援方法として手話通訳がないことも課題である。

そして、就業者3名のうち正規雇用者は1名であり、多くの聴覚障がい者が不安定な雇用形態で働いていることも課題である。職場における情報保障も手探りでやっている状況であり、十分な情報保障が整っていないことも確認した。就職活動においても就職後においても壁は依然として厚い。

高校までの教育環境について、Dさんは高校で情報保障を受けることが出来たが、制度的な保障ではなく個人の働きかけによるものであった。多くの聴覚障がい学生は情報保障の無い環境で学ぶか、難聴学級またはろう学校で学ぶかの二択であった。

何らかの支援があった場合でもAさんCさんへの支援が結果的に同級生から引き離すことになったように、本人の望むものと一致しない支援であった。彼ら彼女らが求めていたことは、情報保障とともに皆と共に学べる環境である。この二つをいかに両立し実現するかが問

われている。

そして、Aさんを初めとして多くの聴覚障がい学生が、私的空間におけるコミュニケーションの困難を語っていた。情報保障がある程度整いつつある大学時代においても、日常生活でのコミュニケーションの難しさ、孤立感は依然として解消されていない。講義など公的な空間での情報保障については意識が共有されつつある中、次は私的な空間でのコミュニケーションの課題への取り組みが求められる。

5.3 展望

Aさんの指摘や東野(2009)が言うように、ようやく聴覚障がい学生の私的空間でのコミュニケーションの課題に光が当たりつつある。しかし、具体的な議論はあまりなされておらず、議論を深めるとともに新たな取り組みが必要である。

具体的な案として場所と組織の創設が挙げられ、人や情報の集約、コミュニケーションモデルの提示、理解啓発、情報保障の充実、学内・学外との連携等の機能が求められる。この場所にはコーディネーターが常駐し、手話や筆談が当たり前のようになされる。つまり空間全体が情報保障されているのである。ここでのコミュニケーション方法をモデルとして、私的空間でのコミュニケーション方法の拡大を試みるのである。

クラスの固定しない大学生活では、ある程度固定した人間関係と多様なコミュニケーション方法のある空間の提供は、学生生活に落ち着きをもたらすであろう。そして、ノートテイクや手話の勉強会や聴覚障がいを含めた大学内のマイノリティについて理解啓発するプログラムも行う。情報保障の技術の向上と意識を全学的に広げる試みである。

更には大学間連携や地域連携の機能も備え、他大学のノウハウや地域の手話通訳、要約筆記との連携を図り、地域の力も借りた形で情報保障を充実させるのである。特に手話通訳は地域の力が必要となる。大学での取り組みを小中高校等の教育機関や仕事の分野に提供することもできる。

このような環境で聴覚障がい学生はエンパワメントされ自身のニーズを周囲に伝え、仲間と共にコミュニケーションの課題に取り組むことが出来る。そして、ゆくゆくはコーディネーターのみならず教員として活躍する人材も期待される。

聴覚障がい学生、一般学生、教職員、地域が聴覚障がい学生支援に複合的に取り組み、公的空間のみならず私的空間でも安心して過ごせる大学をつくるのである。沖縄大学の聴覚障がい学生支援の新たな幕開けである。

5.4 本稿の課題

聴覚障がい学生支援は聴覚障がい学生と支援学生が中心の活動であるが、本稿に支援学生の視点は盛り込まなかった。しかし、支援学生の不足や聴覚障がい学生と支援学生の関係性やコミュニケーションの課題については、支援学生の視点にも重要な示唆があると考えられる。

また、私的空間でのコミュニケーションの課題は本質的なテーマである。さらに考察を深めたい。

6. 謝辞

快くアンケートに応じてくださった皆さん、そして長時間のインタビューに付き合ってくださったAさん、Bさん、Cさん、Dさんに感謝申し上げます。ありがとうございました。

引用文献 参考文献

- 浦部奈津美 岩田吉生 2011年 「日本の高等教育機関における聴覚障害学生の受け入れ状況の現状と課題」『障害者教育・福祉学研究』 第7巻 pp17-24
- 大杉豊 2010年 「エンパワメント指導」『一歩進んだ聴覚障害学生支援』 pp170-180
- 白澤麻弓 2005年 「一般大学における聴覚障害学生支援の現状と課題～全国調査の結果から～」『第2回「障害学生の高等教育国際会議」予稿集』 pp9-10
- 白澤麻弓 2013年 「聴覚障害学生支援の現状と展望④」『週刊教育資料』 2013年5月27日号 pp28-29
- 沖縄大学障がい原論 2010年 『2009年度「障がい原論」田中息吹さん（2009年12月21日）講義録』
- 沖縄大学特色GP 2010年 『学生とともに歩む障がい学生支援 2007年度採択特色GPノートテイクから広がる大学づくり活動報告書』
- 厚生労働省 2008年 「身体障害者、知的障害者及び精神障害者就業実態調査」
- 小林多寿子 2010年 『ライフストーリーガイドブック ひとがひとに会うために』 嵯峨野書院
- 座主果林 打浪(古賀) 文子 2009年 「聴覚障害学生とノートテイカーの関係の変化—高等教育における情報保障の現状と課題—」『奈良女子大学社会学論集』 第16号 pp165-180
- 日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク 2010年 『一歩進んだ聴覚障害学生支援』 生活書院
- 日本学生支援機構 2006～2015年 『障害のある学生の修学支援に関する実態調査 平成17～26年度』
- 早川竜也 2001年 「SOUL BOX あるボクサーの彷徨」『Number』 104号 pp93-101
- 東野充倫 2009年 「聴覚障害者の非公式なコミュニケーションへの対処戦略 —当事者のライフストーリーの分析から—」『社会問題研究』 第58巻 pp103-115
- 松崎丈 2004年 「聴覚障害学生の高等教育におけるエンパワメント」『聴覚障害学生サポートネットワークの構築をめざして—第1回アメリカ視察報告書—』 pp31-38
- 横山正見 2007年 「沖縄における聴覚障がい学生支援の現状と課題」『2006年度沖縄大学福祉文化学科卒業論文』

横山正見 2013年 「風疹による聴覚障がい学生の追跡調査 ～沖縄大学での学生生活を中心に～」 『沖縄大学地域研究所 地域研究』 No11 pp43-51

横山正見 2015年 「沖縄県内高等教育機関における障がい学生支援の現状と課題 ～聴覚障がい学生支援を中心として～」 『沖縄大学地域研究所 地域研究』 No16 (投稿中)

参考資料

沖縄タイムス 2009年4月21日

全日本ろうあ連盟 ホームページ <http://www.jfd.or.jp/>

沖縄県障害のある人もない人も共に暮らしやすい社会づくり条例 ホームページ

<http://www.pref.okinawa.jp/site/kodomo/shogaifukushi/keikaku/kyosei-shakai/jorei.html>

日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク ホームページ <http://www.tsukuba-tech.ac.jp/ce/xoops/>

聴覚障害者自立生活センター LIC ホームページ <http://www.npo-lic.com/>

株式会社アイセックジャパン ホームページ <http://www.isceej.co.jp/index.html>

資料 沖縄大学の聴覚障がい学生支援に関するアンケート結果

1. 選択回答集計

沖縄大学の聴覚障がい学生支援に関するアンケート結果

性別 (人)

男性	女性	その他
5	5	

年齢 (人)

～19歳	20～24歳	25～29歳	30歳～
4	2	3	1

障害等級 (人)

手帳なし	5級	4級	3級	2級
1			1	8

2. 記述回答結果 (一部)

沖縄大学への進学理由

- ・面接で入学後に必要な支援は何かと先生から質問してくれた。ノートテイクが必要だと伝えて、先生がしっかりと聞いてくれた。

沖縄大学の聴覚障がい学生支援の良いところ

- ・今まで情報保障を受けていなくて、聴こえないことに不満（不自由）があったが、情報保障を受けて聴こえない分をカバーできてうれしい。
- ・障がいのことを理解出来た人が増えてきた。
- ・コーディネーターが障害者ともテイカーとも話せる関係だった。話しやすい関係は支援現場の問題を把握しやすくなる。
- ・「ノートテイク講座」を通して聴覚障害への理解、聴覚障害者と関わる機会があった。講座を通してテイカーへのアドバイスの幅が広がった。
- ・手話の見方が変わり学ぼうと意欲的になれました。他の大学との交流もあり価値観が変わりました。人生における「一番輝ける青春時代」でした。
- ・どんな時もノートテイクか筆談か、FMマイクを使用するか等、周囲が自然と気にかけてくれた。お願いした場合も快く対応してくれた。
- ・毎年、支援学生の数が増減と不安定ではあるが、組織自体崩れることはなかった。
- ・感謝しきれないほど皆さんに支援してもらい、良かったと思っています。もし支援がなかったら、大学をやめていたりひきこもりで孤独になっていたと思います。
- ・利用学生のニーズに合わせて臨機応変をしてくれたこと。これが一番です。本当にありがとうございました。

沖縄大学の聴覚障がい学生支援の課題

- ・支援委員会に加わらない限り情報がなかった。公開の問題はあると思うが障害学生、テイカーも知った方がいい。
- ・聴覚障がいの先輩、後輩で集まる場が少なかった。
- ・情報保障の範囲が講義のみと限られていた。
- ・ゼミのノートテイクが追いつかず意見が言えない。参加した感が得られなかった。
- ・高校まで情報保障を受けたことが無かったため、ルール等全く知らなかった。
- ・コーディネーターが短期契約であること。また障がいやコミュニケーション方法など説明しなければならぬのか、と面倒さがあった。
- ・聴こえの状況を支援学生に伝え、どのようにノートテイクしてほしいかをうまく言えなかった。
- ・テイカーさんの責任感が薄くなってきたと感じたこともあった。技術面だったり体調管理だったり。
- ・当事者よりも先に立ってたくさん動くべきでは無いかなと思いました。
- ・沖縄大学の聴覚障がい学生支援は無くしてはならない支援だと思っています。小中高校、専門学校、短期大学などに入学してくる聴覚障がい学生がいると思います。彼らの為に聴覚障がい学生支援を作っていくことが課題だと思っています。
- ・聴覚障がい学生が自分の声（口話、手話、筆談）で先生やクラスの友達に聴覚障害のことを伝えることから始めると良い。そこから課題が次々と生まれてくるだろう。

注

- 1 ライフステージに沿って質問し人生経験やその時の考えを聴いた。信頼関係を基にしたライフストーリーインタビューは語り手と聴き手の共同作業であり、時に双方の「物語り」や「歴史」が再構築されていくものである。
- 2 障がい学生支援を持続的、安定的に運営する役割を担う。支援者となることもあるが支援者とは異なる。具体的な業務は支援学生の募集・育成・配置、教職員・関係部署との連絡調整、障がい学生の相談対応、理解啓発など障がい学生支援における個別、全体の調整を担う。コミュニケーション能力や障がい理解が求められる。
- 3 全国の高等教育機関に在籍する障がい学生は、2005年の5,474名から2014年は14,127名となり、2005年以降で最多となった「日本学生支援機構（2006）（2015）」。増加の主な要因は発達障がいカウントされるようになったこと、支援体制が整い始め障がい学生が進学しやすくなったこと、相談体制の整備により学生が支援を受けやすくなったこと、等が考えられる。
- 4 障がい者の社会参加を妨げるバリアを取り除き、社会が障がい者の参加を受け入れるための具体的な条件を整えること。高等教育機関における聴覚障がい学生支援の場合、情報・コミュニケーションのバリアを解消し、情報保障を提供する体制を組織的に整えることが求められる「日本聴覚障害学生高等教育支援ネットワーク（2010）」。
- 5 現在18の地方自治体で施行されている。全国で最初に成立した「鳥取県手話言語条例」は、手話が言語であることを定め、手話の普及や手話通訳制度の充実等に取り組み、ろう者とろう者以外共生社会の実現を目指している「全日本ろうあ連盟」。
- 6 「沖縄県障害のある人もない人も共に暮らしやすい社会づくり条例」は、「全ての県民が障害の有無によって分け隔てられることなく社会の対等な構成員として安心して暮らすことができる共生社会の実現」「沖縄県ホームページ」を目指し2014年4月1日に施行された。条例には「必要かつ合理的な配慮を提供する義務」が明記されている。
- 7 「身体障害者手帳、精神障害者保健福祉手帳及び療育手帳を有している学生又は健康診断等において障害があることが明らかになった学生」「日本学生支援機構（2015）」
- 8 本稿で「ノートテイク」と使う場合は手書きノートテイク、パソコンノートテイクを含むものである。
- 9 特色GPとは文部科学省の「特色ある大学教育推進プログラム」であり、各大学が取り組む特色ある教育活動に財政支援を行うものである。沖縄大学は、聴覚障がい学生支援をきっかけに障がい学生支援、学生支援の充実を目指すプログラム「ノートテイクから広がる大学づくり～新たなゆいまーの創造を目指して～」が選定され、2007年度～2009年度に取り組みされる。
- 10 1964、65年に沖縄で1,376名が風疹に罹患し、約400名の聴覚障がい児が確認された「横山（2013）」。
- 11 第407回沖縄大学土曜教養講座「支えあいから生まれる絆～聴こえない学生のコミュニケーションを考える～」2005年10月29日開催104名参加。沖縄大学、沖縄国際大学、琉球大学、名桜大学、沖縄キリスト教短期大学の5大学の学生、教職員が聴覚障がい学生支援の現状と課題を議論し

た。

- 12 進行性の障がいであったため、状況に応じて独自の支援方法を試行錯誤した。盲ろう学生の大学卒業は国内で3人目「沖縄タイムス（2009）」。
- 13 ノート等への記入が困難な学生への支援方法。障がい学生の指示により支援学生（1名）が板書や要点、感想カード等を代理で記入する。対象学生や状況に応じて筆記用具の準備やページをめくり等も行う。現在、肢体不自由学生4名、視覚障がい学生1名が利用する。
- 14 聴覚障がい学生支援の発展と普及を目的としたネットワーク組織。2004年に設立され事務局は筑波技術大学にある。シンポジウム開催、教材開発、情報発信、研修会等を行う。現在23の大学・機関が拠点校として加入している。
- 15 年代別の就業者割合は20～24歳50%、25～29歳52.5%、30～34歳58.7%である。この調査は、15～64歳で身体障害者手帳、療育手帳又は精神保健福祉手帳等所有者を対象に無作為抽出で就業実態を調べたものである。聴覚障がい者のみの統計が見当たらず身体障がい者の割合を引用した。
- 16 話しことばを視覚化するツール。顔近くで手の形を使い子音を表し、口の動きで母音を表す。唇の動きでは同じように見える単語を視覚的に識別することができる。読唇技術から推測作業を取り除く。
- 17 2003、2004年度は短期講座、2005～2010年度はカリキュラムとして開講。
- 18 この団体では、パソコンテイク通訳者や手話通訳者を募集育成し、プライベートな場面にも通訳者を派遣している。派遣費用は聴覚障がい者の自己負担であり、通訳者1人1時間につき1,000円と交通費である。
- 19 早川（2001）によると、JBC（日本ボクシングコミッション）の内規では、①ゴングが聴こえないためラウンド終了後も攻撃を加える危険性、②緊急時、医療者や関係者との意思疎通が困難で取り返しのつかない事態に陥る恐れ、を欠格条項の理由に挙げている。2014年にAさんは東京、西宮でアマチュアボクシング登録申請をしたが登録できなかった。「医事ハンドブック」に「ゴングが聞こえないもの、聾の人は認めない」と記載されていたという。
- 20 FMマイクとFM受信機のセットで用いる。講師など話し手がFMマイクを持ち、音声をFM電波に乗せて流す。聴覚障がい学生はFM電波対応の補聴器で音声を受信する。補聴器に周囲の雑音が入らないため鮮明な音声を聴くことができる。
- 21 2011年9月に筑波技術大学で開催され59名（聴覚障がい学生18名）が参加。PEPNetが主催。聴覚障がい学生のエンパワメントを目的に、支援の活用、就職への備え、交流、キャリアデザインテーマで講演会やワークショップが開催される。
- 22 大杉（2010）は、社会的弱者が本来持っている能力を引き出し、社会的な権限を与えることであると定義し、松崎（2004）は、「当事者は専門家の援助を前提条件とするのではなく、自ら問題を解決し、自分たちに影響を及ぼす事柄を自分自身でコントロールし、実践していくこと」と聴覚障がい学生支援におけるエンパワメントを定義する。

- 23 沖縄大学の創設者の名前を冠した記念賞。学業、課外活動において優れた活躍のあった卒業生に贈られる。
- 24 沖縄県うるま市にある株式会社。インターネットを活用した文字通訳事業等を行う。話し手が携帯電話等で音声情報をアイセックジャパンに送信する。文字通訳者が文字に変換し利用者に送信する。利用者はスマートフォン等で確認する。